

ネットいじめ，学校裏サイトの危険から 子どもを守るための情報モラル教育

山形大学 学術情報基盤センター 准教授
加納 寛子

1. はじめに

しばらく前に福島で，中学時代にはスキーの国体で優勝し，野球でもレギュラー選手として活躍した高校生が，夜中に隣室で熟睡している無防備な母親の首を切り落として殺害するという，残虐非道な事件が起きた。このような事件が起きたからと言って，野球やスキーをすると母親殺しをするようになる，スポーツを禁止しよう，という議論は起きない。

だが，もし，ネットオタクの少年が同様の事件を起こしたならば，そらみたことかと，教員もメディアもネット批判を始めたことだろう。ネットは，トンカチやナイフと同様に道具であって，道具自体にはマインドコントロールするような高度な機能は備わっていない。トンカチやナイフは人を殺す道具にもなりうるが，「トンカチやナイフの先の部分を人に向けて手渡してはいけない」などの道具の正しい扱い方を身に付け，必要に応じて扱えるようになる必要がある。

ネットも同様である。ネットやケータイはまだ早いと，禁止していて何も教えずにいれば，安全なのだろうか。学校や家庭で禁止しても，ネットカフェなど，いくらでも子どもたちの周りにはネット環境がある。親や教師などの目の届くところで禁止しても，目の届かないところで，危険にさらされてしまうのである。子どもたちがネットに触れてしまう前に，学校や家庭で，ネット上のマナーやルールなどの情報モラルをきちんと教えることこそ，子どもたちをネットの被害者・加害者にしない対策である。

2. ネット被害

ネット上での被害というと，ワンクリック詐欺やフィッシング詐欺，出会い系サイトがらみのトラブルを思い浮かべる人が多いし，実際，そのような詐欺を目的とした膨大なメールを年中受け取

っている。このようなメールは，フィルタリングソフトである程度防ぐことができるし，メーラーの設定で迷惑メールフォルダに仕分けをして，まとめて削除することもできる。2002年に施行された迷惑メール規制法により，受信者の同意なしにメールを送る場合，表題に「未承諾広告」と記し，受信拒否を通知できる連絡先を書き込むことを義務づけた。受信拒否を通知した人への再送信も禁じた。今後さらに規制が強化されるようだ。

子どもがオークション詐欺の被害に遭うことを心配する大人もいるが，詐欺に発展する情報を提供しない限り事件は起きない。パソコンにクレジットカード番号などを記憶させてあるから，子どもの誤操作や，興味本位の操作で，被害に遭ってしまうのであって，パソコンに記憶させていなければ，クレジットカード番号を故意に入力しない限り被害には発展しない。クレジットカード番号や，オンライントレードのパスワードなどを，子どもが触れる可能性のあるパソコンに記憶させず，重要な番号はきちんと管理することが大人の義務である。

だが，フィルタリングソフトなどの機械的設定では防ぐことができない被害もあり，その一つは，子ども同士のネットいじめであり，昨今深刻化している。これは，子どもたちのネット環境を大人の目に触れやすくする環境作りと，教育によって地道に教えていくほか対策はない。

3. 学校裏サイトは現代子ども文化の一つ

学校の公式サイトに，子どもたちが自由に書き込んだりコミュニケーションの取れる掲示板やブログがおかれることはほとんどない。一頃，地域に開かれた学校づくりの一環として，地域からよりよい学校へのアイデアを求める目的や父母とのコミュニケーションのために，電子掲示板が設置されることもあったが，学校への批判で炎上した

り、不当な書き込みに悩まされたあげく、電子掲示板が廃止になった学校は少なくない。

しかし、クラブ活動の連絡などに電子掲示板を利用したいと希望する子どもたちは多く、無料のWebサービスを利用して自分たちの世界を形成しているのである。学校のグラウンドでは遊べなくなった子どもたちが、空き地を探して、空き地で遊ぶのに似ている。

名刺の代わりにプロフィールで自己紹介をし合ったり、ネットやケータイを駆使したコミュニケーションは、現代子ども文化の1つを形成している。大人には異様に見えるかもしれないが、新しい子ども文化として認識すべきである。

便利であるから利用するのであって、表向きに禁止をしても水面下にますます潜ってしまうだけである。電子掲示板だけでなく、自分たちで演奏した校歌や学校の写真や、話題ごとにスレッドを変えた電子掲示板をおく本格的なサイトもある。俗に言う「学校裏サイト」である。学校裏サイトというと、禁止されていることや悪さばかりしているサイトのイメージを持つ大人もいるが、悪さをするためだけにコミュニティーを形成するほど、ずさんではない。学校裏サイトの多くは、グループごとの調べ学習を効率的に行ったり、部活の対抗試合で負けた要因を議論し合ったり、宿題の確認をしたりと、まじめな内容が多い。

4. 学校裏サイト ネットいじめの危険

しかし、学校裏サイトでひとたび、口論などが発端で、一人への攻撃やいじめが始まると、はやし立てるギャラリーが加わり、歯止めがきかなくなる。そして、ターゲットとなった子どもを自殺へ追い込むほどに傷つけることになる。

2006年10月に、山梨県の県立高校2年の女子生徒がインターネットに開設したブログに中傷を書き込まれるいじめを受け、自宅で精神安定剤を大量に飲み自殺未遂を凶るといふ事件が起きた。不幸中の幸いにも、家族が気付いて病院に搬送され一命は取り留めた。生徒のブログのコメント欄に、行動などを中傷する文が大量に書き込まれていた。同学年の別の女子生徒が書き込んだ事実を認めため、いじめと断定された。女子生徒は自殺未遂事件の以前から、ケータイのメールで友人

にいじめ被害を訴えていたという。

相手の中傷することを、けんかの最中に口走ってしまうことは、子ども時代には良くあることだ。仲違いした後に、しまった、と思う苦い経験を誰しもが持っているのではないか。そういった経験を積んで、大人になっていけば、失言はあまりしなくなる。子どもの頃の口論は、成長過程に必要なプロセスともいえる。だが、1対1の口論と、ネット上での公開口論では、全く意味合いが異なる。ネット上は1対1の世界ではなく、公共の場であり、公共の場では子どもであるか大人であるか関係なく公共のマナーを守らなければならない。「1年1組の子はゴミ。ゴミはゴミ箱へ捨てよう。」「うざい 男は死ぬべし。」などの非常にきつい文言が、子ども同士の掲示板に並ぶことがある。

このような文言が野ざらしにされる社会は、未開社会に近い。子ども大人も関係なくネットを利用するネットジェネレーションは、交通ルールのように情報モラルを身に付けることが義務になりつつある。大人さえ身に付けさえしていれば、刑事事件になる前に阻止できたであろう事件もある。

2006年8月、大阪市内の私立中学校に関する話題を在校生らが自由に書き込む掲示板に、当時1年生の女子生徒について「うざい」「ブス」などと中傷する内容が書き込まれた。後に、同じ塾に通っていた別の女子中学生(13)が書き込んだことが判明した。この中傷は同10月中旬、友人から知らされて女子生徒が気づき、母親が掲示板のプロバイダーにメールで削除を要請したが、プロバイダーは「掲示板の管理人に言ってほしい」と回答。改めて管理人にメールなどで要求したが、応じてもらえず府警に相談した。府警のサイバー捜査担当者が、書き込んだ女子生徒と管理人の男を割り出し、掲示板削除に至った。書類送検された「学校裏サイト」管理人は、大阪市内にある普通の材木卸会社の社員の男(26)で、「中傷にあたと分かっていたが、これくらいなら削除するに値しないと思った」と供述していたという。

まさに、誰にでも扱えるようになった情報機器の便利さが裏目に出た事件である。電子掲示板の管理人は、特に情報技術に関して専門的な知識はなくても扱えてしまう。この事件は、書き込んだ生徒に対する情報モラル教育が不十分であった

点、材木会社の社員が適正な情報モラルを学んでいなかった点、プロバイダーが被害者サイドからの訴えを無視した点が大きな問題要因である。この3つの要因のうち、一つでも適正な判断のできる人がいたならば、刑事事件には発展しなかったであろう。

5. 学校裏サイト 悪意の第三者による危険

上記の事件では、掲示板の管理者は一般の会社員であったが、広告収入を目当てにした無料掲示板などにもよく子どもたちの「学校裏サイト」が設立される。無料掲示板は、当然、その掲示板を訪れる「客」に合わせた広告が貼られる。子どもたちが部活動での連絡や、試験情報、友達との交流に使う掲示板に、子ども向けの広告を貼っても、もともと購買力の少ない子どもたち相手では、十分な広告効果は得られない。子ども向けの掲示板を訪れる不謹慎な大人たちを相手にした広告の方が、効果があるというのだろう。掲示板の内容は、たわいのない、子ども同士のやりとりにもかかわらず、掲示板の周囲に貼られている広告は、出会い系サイトや下着販売、グロテスクなアダルトサイトのリンクが、所狭しと貼られている。

学校裏サイトの掲示板は、掲示板の周りの広告だけでなく、本文もアダルトサイトの広告に利用されてしまうことがある。突然知らない人が仲間のように書きこんでくるのである。「さっき撮った写真です。見てね 子」というコメントの下に、アドレスが書かれている。友達かな、とクリックすると、女の子が自分の裸をケータイで撮影した動画が表示され、そのあとしばらくたってから、入会料や動画閲覧料の支払いのメールが届いてしまうことがある。動画を表示させている間に、一瞬でパソコン内にあるメールアドレスや名前などの個人情報が盗まれてしまうクッキーが仕込まれているのである。

普通の中高生の女の子が、自分の裸を撮影していると誤解し、子どものケータイの所持に猛反対している大人もいるようだが、たいていはやらせである。中高生のお小遣い稼ぎの場合もあるが、アジアの貧困地域の子どもに、日本の女子中高生らしい服装をさせ、卑猥な映像を撮影する場合すらあると聞いたことがある。

少なくとも、何のメリットもなくそのような書き込みをするほど愚かではない。ケータイを買い与えると、自分の裸を撮影してネット配信するのではないかと危惧して、ケータイの所有を禁止するのは、本末転倒である。もっと子どもを信用すべきである。ケータイ会社の肩を持つつもりもないが、一部の大人が危惧するデメリットよりも、辞書機能や電卓、ネット検索や防犯ベル兼セキュリティ会社への通報システムなど様々な機能のついたケータイは、緊急時に役立つメリットの方が大きい。GPS付きのものを持たせておけば、子どもが今どこを歩いているのかを確認し、常に見守ることができる。

6. ネットいじめ、学校裏サイトの危険から子どもを守るための対策

問題を整理すると、下記の3点である。

問題1：環境的側面

教員や保護者の目の届く範囲に、子どもたちが部活のやりとりなどの意見交換をできるような電子掲示板がないため、学校裏サイトに走る。

問題2：指導的側面

学校裏サイトは、教員や保護者の目が行き届かないために、炎上も起きても野ざらしになる。管理できる範囲で子どもたちがやりとりをしていれば、適切な指導をすることができる。

問題3：学習的側面

個人情報保護や著作権に関する知識は広まってきているが、ネットという公共の場でのマナーなどの情報モラルは、大人も子どもも身に付いていない。

問題1に関しては、教員は保護者の目の届く範囲に、子どもたちが意見交換のできるような電子掲示板を用意すべきである。そのようなものを用意しても、どうせ目の届かないサイトで本音を出し合うだけだろうと思われるかもしれない。たしかに、恋愛専用板などは、隠れた場所に子どもたちが勝手に開設するかもしれない。しかし、現状では、宿題に関してや部活に関しての議論すら、公式の場で行うことができないのである。そして、一人の子どもに対して誹謗中傷を行ったり、ネットいじめの温床となっているのは、本来、いじめ目的で作られたサイトではなく、まじめに部活の話などをしてきたような掲示板で起きている。子

ども向けの掲示板を学校があつらえても使わないだろうと、はじめから子どもを信頼しないのではなく、ネット上で子どもたちがコミュニケーションをとることのできる環境を用意し、問題のある発言があった場合には、そのサイトの中できちんと指導していくことが、ネットいじめやネット上での子ども同士のトラブルを減少させる第1の対策である。

環境的側面としてもう一つ大切なことは、ネットカフェに行かなくても、学校や自宅でネットができる環境を用意し、可能な限り教員や保護者の目の届く範囲でネットを利用させ、アクセス先に子どもの目線で関心を寄せる必要がある。自分の子どもが1週間以内にアクセスしたサイトを答えられる保護者は何人いるだろうか、クラスの生徒がアクセスしているサイトを10個答えられる教員は何人いるだろうか。あまりに無関心すぎはしないか。どこへアクセスしているのか教員や保護者が把握していれば、危険を未然に防ぐこともできる。ネットカフェにはフィルタリングソフトが入っていないが、学校や自宅であれば、フィルタリングソフトを利用することで、機械的にアクセス制限をおこなうこともできる。

問題2に関しては、問題1に関連しているが、教員や保護者の掌握できる範囲内でネットを利用させ、ネット上でのマナー違反や思慮の足りない発言などがあつたら、ネットいじめなどに発展する前に、その都度指導し、トラブルの芽を摘んでいく必要がある。

フィルタリングソフトで、自殺サイトやアダルトサイトへは行かないようにすることは容易であるが、フィルタリングソフトにかからないサイトの中にも多くの誘惑がある。教員や保護者の用意したサイト内だけで、子どもたちがコミュニケーションをとり、遊んでいればよいが、興味本位でいろいろな場所へ、ふらふらと遊びに行ってしまう子どももいる。ネット利用を禁止しても、隠れてアクセスするようになるだけで、根本的な対策にはならない。子どもたちが行きそうなサイトを巡回し、見守っていく必要がある。

最近利用者が増大傾向にあるセカンドライフ内でも、悪意の第三者に声をかけられたり、RMTの問題など、多数の危険が指摘されてきている



図1 セカンドライフ内の子どもの安全見守り隊巡回の様子

(2007, 加納)。図1は、セカンドライフ内の子どもの安全見守り隊の巡回の様子である。セカンドライフ内では、どのアバターが18歳未満であるのか区別はつかない。しかし、見守り隊の帽子をかぶって巡回することにより、抑制作用が働くであろうとはじめたところである。

問題3に関しては、4節で挙げた大阪のネットいじめの例のような事件で、逮捕された材木会社の社員が、刑事事件に発展するとは思ってもよらなかったように、このまま行けばこの種の事件が頻発する危険がある。パソコンを買って、少し使い始めた大人や子どもが、いろいろさわっているうちに、こんなに簡単に電子掲示板も作れるのか、と、試しに作って放置されたような【空き地】が際限なく増えていく。ネット上での仲間内での交流スペースを探している子どもたちが【空き地】に住み着く。空き地は無法地帯であり、互いに傷つけ合ったり悪意の第三者の餌食になったり、事件が頻発する。ほとんどの大人は、子どもの頃に、学校で情報モラルを学んでいない。自主的にも身に付けていない場合が多い。落書きができるからと言って読み書きを身に付けているとは言わないように、パソコンで電子掲示板が設置できるからと言って情報リテラシーを身に付けているとは言えないのである。ネットがらみの事件や争いを減らすためには、情報リテラシーと情報モラルをきちんと身に付けることが、情報社会に生きる人々すべてにとって急務の課題である。

参考文献

- 1) 加納寛子『実践 情報モラル教育 コピキタス社会へのアプローチ』北大路書房, 2005年
- 2) 加納寛子『情報社会論 超効率主義社会の構図』北大路書房, 2007年
- 3) 加納寛子『ネットジェネレーションのための情報リテラシー&情報モラル - ネット犯罪・ネットいじめ・学校裏サイト -』大学教育出版, 2008年